

月刊ふるし

8月号

《今月の表紙》

中3 S.H.

「青い水平線」

今号の内容

【特集】

華道部 「学校祭作品」

美術部 「学校祭作品」

美術 「高3 油彩 馬頭骨」

国語 「高1 エッセイ」

華道部 学校祭作品

部員皆が同じ花を活ける普段のお稽古とは異なり、学校祭ではそれぞれが好きな花と花器・花台を選び、バランスを考えながら慎重に作品を仕上げました。ここでは高校2・3年生の作品をご紹介します。落ち着いた雰囲気のもの、優しく可憐なもの、清々しく凜としたもの、——それぞれの個性の違いをお楽しみください。



高3 Nさんの作品
ダリア・リンドウ・ハラン・グズベリ



高3 Hさんの作品
ピラカ・HBユリ・ブルースター



高3 Iさんの作品
セローム・バラ・スプレーカーネーション



高2 Mさんの作品
キク・スターチェリー・テマリシモツケ



高3 Kさんの作品
マリンブルー・アスター・ダリア・ピアカ



高2 Eさんの作品
ユリ・スプレーカーネーション・ルスカス・キイチゴ



高2 Aさんの作品
ソケイ・ドラセナ・スプレーカーネーション・アンズリウム



高2 Fさんの作品
ななかまど・ひまわり・アスター・なでしこ



高2 Tさんの作品
シネンシス・カーネーション・ウツギ・オクラレルカ



高3 Aさんの作品
ヘルコニア・バラ・ベニカナメモチ



高2 Mさんの作品
アジサイ・カラー・タニワタリ・アスパラ

美術部 学校祭作品

入部したての1年生と数名の2年生が、アクリル絵の具を使って油彩風の絵に挑戦しました。それ以外の2・3年生は、各自のテーマを決めて、水彩・色鉛筆・ペンなどで表現しました。

高校生は油彩の大作に取り組みましたが、高文連に出品してからのお披露目となります。次号掲載予定です。



「花」 中2 Sさんの作品



「花達」 中2 Kさんの作品



「夏のおとずれ」 中1 Nさんの作品



「バラ」 中1 Kさんの作品



「ティータイム」 中3 Oさんの作品



「青い水平線」 中3 Hさんの作品



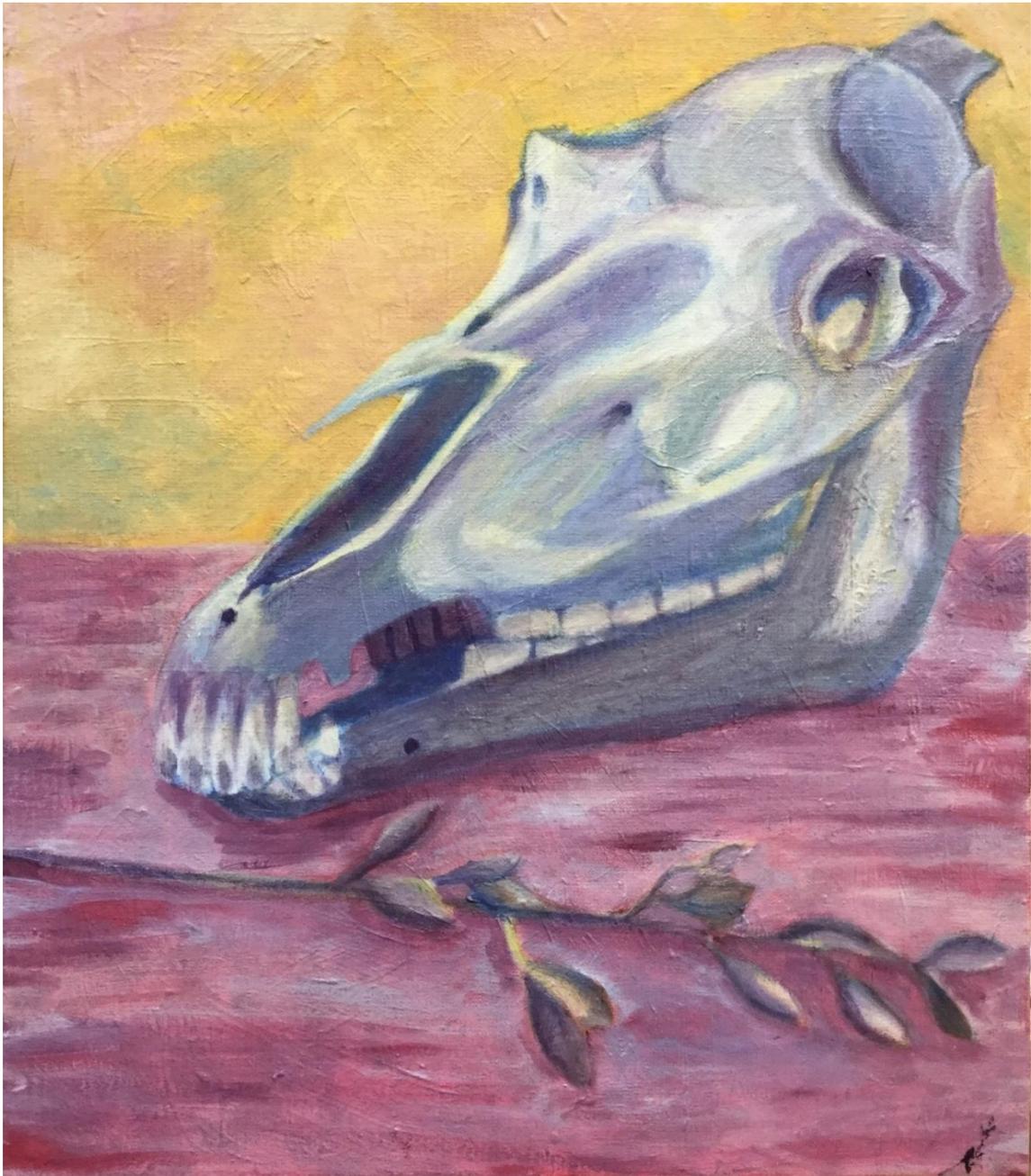
「光」 中2 Kさんの作品

「高3 油彩 馬頭骨」

真っ白な布地の上に、白い馬頭骨。色のないモチーフを与えられた生徒たちは、そこに各自の解釈を加え、自分らしい色とタッチを模索し、それぞれの世界をつくり上げました。



Kさんの作品



Mさんの作品



Wさんの作品



Sさんの作品



Tさんの作品



Fさんの作品



Tさんの作品



1さんの作品



Kさんの作品



Yさんの作品

「高1 エッセイ」

第二十五回「小諸・藤村文学賞」

佳作 受賞作品

現高2の生徒が、昨年度のコンクールに応募し、見事受賞した作品です。中3の夏休みに参加したオーストラリア海外研修。たった一人のホストファミリーのおばあさんとの思い出が、真っ直ぐなことばで綴られています。優しくあたたかな気持ちになれる、素敵なエッセイです。

忘れられないオーストラリア研修

大越 はつの

十五歳の夏。

私は、学校が企画した、希望者のみが行くことができるオーストラリア研修に参加した。慣れない地に降り立つ恐怖と、十二日間お世話になるホストファミリーとの対面に緊張しながら、飛行機で向かっていた。事前に、自分のホストファミリーがどのような人なのか知らされていたが、私のファミリーはオードリーというおばあちゃん一人だけだった。そう、一人だけ。私の中では三人ほどの家族を想像していたし、実際、友達のホストファミリーはほぼ三人以上の家族構成だったため、がっかりした。

この複雑な気持ちを胸に抱えながらオーストラリアに着き、ウェルカムパーティーを迎えた。そこでは多くのホストファミリーが私達を待っており、一人一人が名前を呼ばれて家族と対面した。私は思いのほか早く呼ばれ、こ

の時初めてオードリーと出会った。いきなり私の顔面にオードリーの胸が飛び込んできたのに驚き、ぎゅっとハグされながら、ああ外国なのだな、と実感した。全員の名前が呼ばれ、各家族が固まって一つの円になった。周りを見てみるとやっぱりみんな家族が多くいて賑やかだった。だが、私にはオードリー一人だし、緊張していて会話が全然できなかつた。疎外感を覚え、周りと違った家族構成に恥ずかしささえ感じた。

しかし、突然司会者が円の真ん中に立ち、速すぎる英語で何かを話し始めた。すると、その場にいた全員が一齐に私を凝視し、突然歌い出した。そう、全世界共通の歌、「ハッピーバースデイトゥーユー」だった。今日は紛れもなく私の誕生日だ！ 衝撃が大きすぎて、ただただ目を見開いていた。思考は停止状態。周りのホストファミリー、同級生、付き添いの先生、みんなが笑顔で歌っていた。いつの間にか歌が終わり、司会者が私に感想を聞いてきた。

私は何かを喋ろうとしたが声が出なかった。喉がぎゅつと苦しくなり、涙が溢れてきた。何も言えなかった。だが次の瞬間、私の涙腺はさらに刺激されたのである。円の中心にケーキを運びながら、オードリーがやってきたのだ。この時にやっと、オードリーが私のために考えてくれたのだと気付いた。オードリーはろうそくの火を消した私を見て、にっこりと笑いかけてくれた。

こんな盛大な誕生日を迎えたことは今までない。私は、さっきまで周りを気にして、ホストファミリーがオードリーだけであったことを恥じていた自身を、逆に恥じ、後悔した。こうして私のオーストラリア滞在は、オードリーのおかげで最高のスタートを切ることができた。そしてその日から私のオードリーに対する思いも変わっていった。

家の中は、やっぱり二人きりというだけあり、寂しくなっただけあり、寂しくなっただけあり、寂しくなっただけあり、寂しくなっただけあり、恋しく思うこともあったが、オードリーも私の気持ちを察して、寂しくなら

ないようにテレビをつけてくれたり、私の不器用な英語に真剣に耳を傾け、必死に理解しようとしてくれたり、逆に私が聞き取れなかったら、何度もゆっくりと話してくれたりした。

ある時友達の一人から、「オードリーって顔怖いよね。喋らないと怒っているみたい。」と言われた。この時初めて、オードリーは顔の彫りが深いせいもあって、怒っているようにも見えろと思つた。でもそう指摘されるまで気づかなかつたのも、私がオードリーと生活していくうちに、オードリーの優しさに触れて、彼女の感情を理解できるようになつたからであらう。たとえば他人から見て怒っているように見えても、実際は全然怒っていないのである。

また、オーストラリアに滞在している間はずっとオードリーだけと一緒に過ごすと思つていたのだが、オードリーは私にオーストラリアを楽しんでもらえるように、近所の友達を家に招いて食事をしたり、彼女の小さな孫にも

合わせてくれたり、私の友達とそのホストファミリーを呼んでパーティーを開いてくれたりした。これらの計画は、私がホームステイする前から立ててあり、私がおばあちゃん一人と暮らして退屈しないように考えてくれていたのだそうだ。私の気持ちを私と会う以前から察してくれていたのだ！ 私は行く前までは、ここまで気遣ってもらえるとは全く思っていなかった。常に驚かされる日々だった。

日本に帰る前日の夜、それまでの賑やかな時間とは違って、静かに二人で夕食を食べていた。私はオーダーリーに、避けていたあの話題を話し始めた。明日でお別れするということを。そして、我慢できず話しながら涙をこぼした。だがオーダーリーは涙をこらえた赤い目で、いつものゆっくりとした英語で、明日まで涙はとっておこう、と言った。私はすぐに泣くのをやめて、最後の一日をオーダーリーと楽しく過ごした。

そして、とうとうお別れの時。私を集合場所まで送ってくれた。ウエルカムパーティーの時にオードリーが私にしてくれたように、今度は私がオードリーにぎゅっとハグをした。そして互いに涙を流し、また会う約束をして別れた。

十六歳の夏。

私の知らない後輩が私のクラスに来て、ジップロックに入ったトートバッグを私に渡してくれた。オードリーからだった。その後輩も、オーストラリアでオードリーの家に滞在したのだという。そして、私への誕生日プレゼントを託されたそう。バッグとともに手紙も入っており、懐かしい字に心が和んだ。またオードリーに驚かされた！ そう思い、つい笑ってしまった。そして、遠く離れた日本とオーストラリアでも、私とオードリーは繋がっているのだと実感した。